# ２．基調講演　障害のある方への支援機器の活用

畠　山　卓　朗
（星城大学リハビリテーション学部教授）

## １．はじめに

私達は、様々な道具を使うことで便利で快適な生活を実現しています。例えば、高い所のものを取るためには、ハシゴや踏み台を使います。それと同じように、障害のある人には、AT（Assistive Technology、支援技術）というハシゴを用意します。ハシゴのおかげで何かができるようになると、さらに新しい世界が見えてくるでしょう。

さて、ここでの梯子ですが、一見すると機器や技術といったハードウェア中心の世界を連想しがちですが決してそれだけではありません。ハードウェアも大切ですが、むしろソフトウェアこそたいへん重要なのです。支援技術を学ぶ上で大切と思われる主なキーワードを以下に列挙します。

## ２．大切なポイント

### ⑴　障害と自立に対する考え方

ここでは、障害を正しく理解することはもちろんのことですが、それ以前に実は私達の中にも「障害」があるのだということを理解します。障害は決して他人事ではなく、実は身近にあることだということを知ります。普段、眼鏡をかけている人でも、視力に障害があると考えている人はそれほど多くはありません。また、「今は、たまたま、いろいろなことができる状態なのだ」（Temporary Able）という考え方はとても大切です。これは若い時代を中心に考えるのか、あるいは今後ますます増える高齢者を中心に考えるのかによって理解の仕方が大きく変化します。

また、一方で「障害がある人が自立した生活を送るとはどういうことか」を学ぶことが大切です。「独力で出来ることが自立である」「人の助けを借りるのであればそれは自立とは言えない」のような考え方があるのも現実です。しかし、「自分のやりたいことが実現できるのであれば、人の助けを借りてもいいのではないか」のように考え方は大きく変わりつつあります。支援者の価値観の押しつけではなく、あくまでも当事者の要望に耳を傾けることが大切だと思います。

### ⑵　ニーズ把握

障害のある人のニーズは多様です。ただ、ニーズは表面に現れているものばかりではありません。深く眠っているニーズもあります。私達は時として表面に現れたニーズを「真のニーズ」と見間違えてしまうことがあります。一見すると成功したように見えても、しばらくすると「これは私が求めていたものとは違う」という結末を迎えることがしばしば起こります。このような場合、「真のニーズ」と思われていたものが、実は「見かけのニーズ」ということがあります。では、最初から「真のニーズ」が見えているのは誰なのでしょうか？正解は「誰もいない」ということです。例え、長い臨床経験のある専門家たりとても。「真のニーズ」は、利用者を中心として家族・介護者そして支援者などチームが一丸となって育んでいくものです。

### ⑶　技法や支援機器

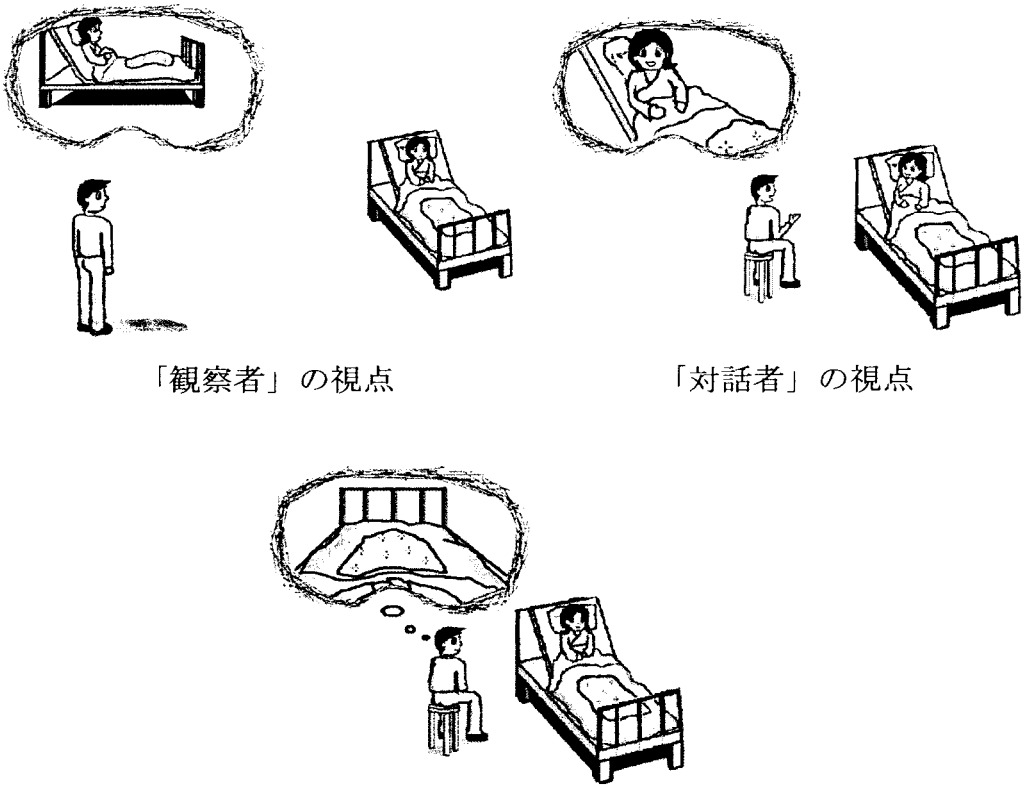
高度なテクノロジーを駆使した支援機器に関する様々な知識はあるものの、一見簡単そうに見えるような技法に関しては意外と情報を持たないといった場合をしばしば見かけます。実は簡単な道具を一つとっても、その使い方次第で利用する人の表現力や生活のしかたに大きく影響を与えることがあります。シンプルテクノロジーからハイテクロノジーまで含めて様々な技法や支援機器について基本的な知識を学ぶことが望まれます。

### ⑷　適用技術

支援の在り方の最終目標は利用者自らが選択し決定していくことです。しかし、実際には利用者が何を選択して良いのか分からないといったケースが多いと思われます。大切なことは利用者に選択できるためのチカラをつけることです。そのチカラとは、自身のニーズを絞り込んでいき真のニーズを見つけることはもちろんのこと、それに併せた支援を実現するための具体的な技法や支援機器を見いだせることです。ここでは中間ユーザの役割が大きいと言えます。そのためには、個々の技法や支援機器の特性や使い方のノウハウを十分に知っておく必要があるでしょう。また、利用場面や状況を考慮に入れた生きた適用技術が求められています。

### ⑸　支援体制

ここには、機器や適用技術に対して正しい知識をもつた




**対象者を捉える３つの視点（イラスト　粟野あゆみ）**

めの教育支援体制、利用者が機器を入手するにはいったいどのような資金援助が受けられるかといった制度、利用者が日常生活において安心して機器を利用できるようにするためのサポート体制、誰でもがいつでもどんな支援方法があるのかを知りたいときに活用できる情報データベース、などが含まれます。

支援制度やサポート体制などにおいては国や地域よって大きな地域格差があるという現実があります。しかし、支援技術に対する正しい知識が広まるにつれて、それは少しずつですが着実に小さくなっていくことが期待されます。

一方で、支援技術者の中身にも変化が現れています。技術ボランティアの登場です。様々な地域で着実に拡がりつつあり大きな役割を果たしています。ただし、ここでも正しい知識や適用技術の普及が不可欠です。独りよがりな支援や判断に陥ることなく、仲間とディスカッションを重ねながら支援することが大切です。また、地域に存在する様々な社会資源と連携しながら活動することが望まれます。

## ３．おわりに

筆者は対象者を捉える３つの視点があると考えています。すなわち第一の視点は観察者としての視点です。この視点は対象者の全体像を客観的に捉える上でとても重要です。二番目に、対話者としての視点です。対象者個々人に合わせたきめの細かいサービスをする上でとても大切な視点です。三番目に、共感者としての視点です、医療従事者は患者さんを医療の対象として捉えることは当然のことでしょうが、一方で私たちと同じ生活者として捉えることは少ないのではないでしょうか。患者さんの気持ちやその人が見ている世界にどこまで接近することができるかどうかは私たちに与えられた大きな課題です。

対象者を捉える３つの視点　（イラスト　粟野あゆみ）

以上、障害のある方への支援機器の活用に際して重要と思われるポイントを述べました。

今後ますます技術が進歩し、障害のある人を取り巻く環境も大きく変わっていくことでしょう。しかし、これからも変わらないのは、障害のある人のこうしたいという自己実現の気持ちと、それを支援したいという側の気持ちです。

この基調講演をきっかけに、アジア・太平洋地域の方々との間で障害のある方への支援機器活用に関する交流が生まれることを心から期待しております。

URL http://homepage2.nifty.com/htakuro/index_e.html
E-mail hatakeyama@seijoh-u.ac.jp